

木造の最大スパンを飛ばすことで3台のクルマを並べても余裕のスペースを確保したガレージ。壁面の下をカーボン調パネルで覆うことで、排ガスの汚れも気にならないそう。



# The Garage

PICKUP THE GARAGE

ガレージライフの醍醐味を具現化したバックヤードガレージ。T邸 群馬県

日本では父親が子どもと一緒に過ごす時間が短いという調査結果がある。それが関係しているのかは判らないが、父子の関係は母子の関係より希薄になりがちである、という統計もある。しかし、この親子にはそんな傾向を微塵も感じない。なぜなら“クラシックカー”を媒介に築かれた良き父子関係があるからだ。

photo/Masatake-ISHIKO (石河正武) text/Emiko-BABA (馬場恵美子)



間口部のあるガレージの正面を母屋のある内側に嵌めることで、セキュリティ一歩と近所への配慮を考えたT邸のガレージ。木間はのシャッターを兼ねた設計で、そこには優雅でクラシックなガレージ空間が広がっている。

朝晩の気温もぐっと下がり、山の木々も色づき始めた11月。今回お邪魔したT邸のガレージは、そんな季節の移ろいを間近で感じることのできる自然豊かな土地にある。奇しくもこの日は、東京で木枯らし1号が吹いたと発表され、取材中も上州特有の乾いた冷たい強風が吹き荒れた。

「この辺りは赤城山から吹き下ろす赤城風（あかぎおろし）が有名で、とにかく風が凄いです。周りに田畑が多いので、土ぼこりや枯草も舞い上げちゃっ

て…冬は特に大変です」。この土地で生まれ育ったご主人のTさんは働き盛りの30代。今はまだお子さんも小さいが、将来のことも考え、家族ゆったり暮らせる家を建てようと2年前、現在の土地を手に入れたという。

家を建てる前はご主人の実家近くの借家に暮らしていたというTさん家族だが、初めての住まいづくりに関してはそのほとんどの権限を奥さまに委ねたという。訊くと、「住まいは妻の要望を全て叶える代わり

に、ガレージは僕の作りたいようにさせて(笑)」とお互いの要望を尊重して決めたそう。

そんなTさんがガレージに求めたのは大きく3つ。1つは、「最低でもクルマ3台を収容できる広さ」、2つ目は「母屋から離れたバックヤードガレージ」、そして3つ目は「モダンでありながらもクラシックなデザイン」というものだった。実はTさん一家は大の自動車ブリークで、地元で会社を営むお父さまを筆頭に、兄弟揃ってクラシックカーラリーが共通の趣味。



左からF40、XX120ロードスター、アルファロメオGT130が写る。ジャガーは毎年開催される「ラ・フェスタ・ミレミリア」に出場するため5年前、手に入れたそう。

3台収容できるガレージは、そんなお父さまとの共有車であるミウラとジャガーを収めることを視野に入れた要望だった。

母屋から少し離れた敷地内に作りたかったというガレージは、住宅とは別の建築家をお願いしたかったというTさん。そのパートナーに選んだのは、「Kurashima design office」の倉島さんだった。元々クラシックカーのレースイベントで面識があったお二人、ガレージを作る時はぜひ倉島さんをお願いしよう決めていた。

道路から80センチ土盛りされた土地を有効に配分するため、母屋担当の施工会社と倉島さんとで敷地全体の計画からプランニング。緻密な計算によりクルマの出し入れもスムーズに行えるアプローチを確保することで、開放的でストレスのないガレージを実現。また、白を基調としたモダンな内外装にクラシカルな雰囲気を加えるため、あらかし梁は落ち着いたブラウンに仕上げ、床もテラコッタ調タイルすることでクラシックカーにも映える気品漂う空間が完成したのである。

さて、このガレージにはTさんがリクエストしたもう一つの空間と、倉島さんが提案したユニークな空間が存在する。一つは、リビングのように寛げる趣味部



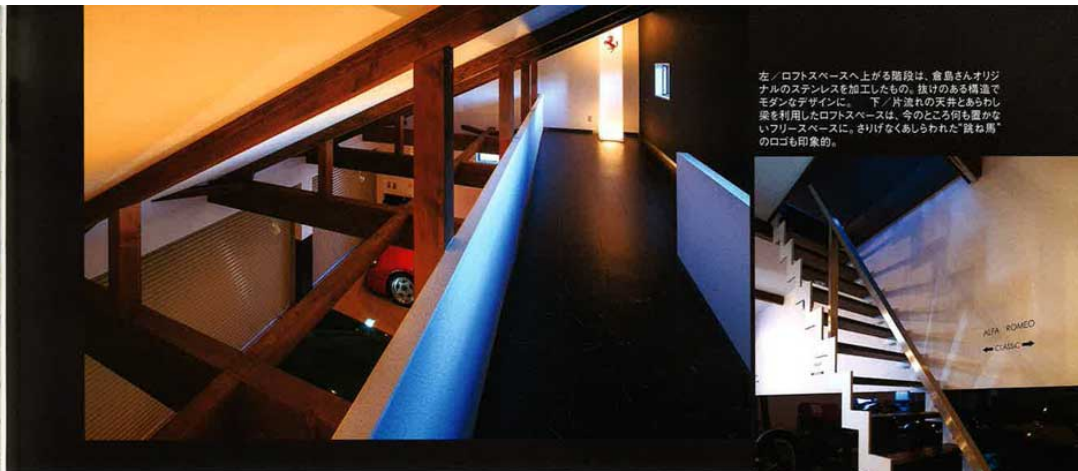
学生のころに乗っていたというベリンリは、悪い入れがあり手放せないそう。今でも定期的に検査させて現状の状態で維持している。



シャッターから吹き込む風やほこりを遮断するため、数センチの溝を作りステンレス製のレールを埋め込んでいる。これでシャッターの隙間は完全になくなる。



Tさんのお父さま所有のF40が鎮座するこのスペースには、先週末までイエローのミウラが置いてあったが、台湾で開催される「フリンピック2013」に参加するため不在であった。



左 / ロフトスペースへ上がる階段は、倉島さんオリジナルのステンレスを加工したものの、掛けのある構造でモダンなデザインに。下 / 片流れの天井とあらかし梁を利用したロフトスペースは、今のところ何も置かないアトリエスペースに、さりげなくあしらわれた「読書角」のロゴも印象的。

# The Garage

PICKUP THE GARAGE

シンプルなデザインにすることで  
“モダン”と“クラシカル”の融合を実現。

ロフトから見下げたところ。ガレージ全体を見渡すことができる構図は、まるでミュージアムのような美しさがある。





左ノ趣味部屋の一角に設けられた書斎スペースとキッチンングのカウンター。右ノ入り組ソファを置いてもゆったりスペースを確保した趣味部屋は、窓を多用することで明るく快適な空間を演出している。

ガレージ内にクリーンに保つための排気ダクトとして、すっかり市民権を得た感のある「排気システム『EG Way Out』」。T 邸は「ダブルタイプ」を導入。



# The Garage

PICKUP THE GARAGE

リビングのような寛ぎの空間でクルマの“静”を楽しむ。

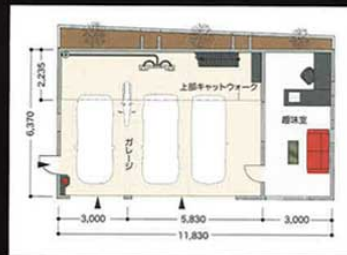
層だ。家族が寝静まる頃を見計らい、夜な夜な小部屋に来てはソファで寛ぎながらクルマを眺めているというTさん。壁の一部を大きなピクチャーウィンドウにしたことで、ガレージ内を真横から眺めることが可能に。さらに、倉島さんお手製のキッチンングのカウンターは、ちょっとした来客時にもお茶やコーヒーでもてなすことができ、非常に重宝しているそう。

一方、倉島さんが提案したもう一つの空間は、片流れの天井とあわし梁を利用したロフトスペース。「ミッドシップのエンジンやロードスターのインテリアを、上から眺めるというアナログ的な楽しみをぜひ味わって欲しい」と、ガレージの楽しみ方を知り尽くした作り手ならではのアイデアが盛り込まれたT邸のガレージ。

クルマを取納するというガレージ本来の役割を超越した、まさに“ガレージライフの醍醐味”を具現化した一つの好例と言えるだろう。



左ノガレージには欠かせない洗面台の枠口は壁に取り付けることでスッキリとし、汚れも拭きとりやすいそう。中ノクルマのフォルムを楽しむための灯りを床に埋め込むことでスペースを有効活用。ステンレス製の壁に蛍光灯を入れ強化ガラスで蓋をしたオリジナルのダウンライトは、駐車の際のマーキングとしても重宝しているそう。右ノクルマに出来る陰影を楽しむスポットライトも効果的に設置。



## PLANNING DATA

所在地 ● 群馬県  
 施主 ● Tさん  
 竣工 ● 2013年5月  
 構造 ● 木造  
 建築面積 ● 95㎡  
 ガレージ面積 ● 72㎡  
 実車 ● 1991年フェラーリ F40  
 1953年ジャガー XK120 ロードスター  
 1968年アルファロメオ GT 1300 ジュニア  
 ホンダ・ベンリイ

## OWNER'S CHECK

- 一番気に入っているところは？  
 リビングのような寛げる趣味部屋から眺めるガレージです。
- ちょっと失敗したところは？  
 とても満足しています。ただ、欲を言えば収納スペースがもっとあったかなど、物を出さるだけ直置きしたくないので、収納棚など検討したいです。
- 次の夢はなんですか？  
 ガレージに関しては、趣味部屋をもう少し充実させてリビングのような空間にしたいです。それと、最近手に入れたアルファをレーシング仕様に変えようか迷っています(笑)。
- 読者へのアドバイスは？  
 「生活の中で絶対に必要か」と問われたら必要ではない部分かもしれませんが、「自分だけのスペース」という贅沢なこの空間は、あると生活がより豊かになると思います。そんな心遣いになれるガレージライフを送りたいですね。

## COMMENT FROM A BUILDER

Kurashima design office  
 建築家 倉島理行さん

Tさんがガレージに求めたコンセプトは、車種を限定しない「モダンシンプル」なガレージでした。道路から直接駐車するよりも、広い敷地を有効利用し、クルマの動線としてガレージを独立させることでセキュリティを確保した。開放感溢れるガレージを実現しました。これからは、もっと時間を過ごせるガレージで、同じクルマ趣味の仲間として参加させてください。

埼玉県さいたま市南区内容6-3-15 3F  
 Phone/0120-301-004  
<http://www.kurashima-design.com/>



ブラックのサイディングにストーンタイルでアクセントを施した外壁には、採光用の小さな窓以外は開口部を設けていない。代わりに小窓の透射窓というところも、外灯を兼ねたライトを設置している。



ご主人お気に入りの趣味部屋からの眺め。部屋の灯りを消してガレージに鎮座するクルマたちを眺めながらお茶を飲むのが日課だそう。